

花のまち

片岡 純子

車で町や村を走っていると、時々ハッとするような美しい花の光景に出会うことがある。走りながら見るので、細かい物は飛んでしまうが漫然と固まっているもの、几帳面に図形化されているもの等々色々あるが、私は振り返ってその花を目で追っている。そしていつも思うのはボランティアという名のもとに、この花づくりにたづさわっておられる方々の姿である。

今は四季を通じて種々の花があるので、年中花の切れることはないが、それが美しくれば美しいほど、陰の人の「手」を感じてしまう。以前、私は笹ヶ瀬川の「土手」に花づくりをしようと思い立ち、それなりの手続きを経て取り組んでみたが、残念ながら挫折してしまった経験がある。

「土手」にズーと花を植えて「フラワーロード」とか何とか名前を付けて実現したら、どんなに素晴らしいことかと夢見ていた。しかし個人レベルでの発想と花づくりの試みは失敗に終わった。このことから学んだことは、町内に関係するもの、公共性のものは皆んなの創意や協調性が不可欠であるということである（当たり前のことだけど）。調和という目には見えない心の連帯があってこそ、丁度水かさが増すように自然のうちに発展してゆくの望ましいのかも知れない。そんなわけで結局3年間頑張ってみたが、この春で終わりにした。なかなかの苦勞でもあったが、よい思い出にもなった。

そんなわけで花づくりは、見た目より結構手間のいることがわかったのである。「花のまち」を通るとき、そこに住んでいる人々の心の豊かさや優しさを感じる。花は無条件にどれも美しい。見る人の心をほのぼのとさせてくれる。感動もある。花を作るときに楽しむのはまず自分自身であるけれど、同時にそこを通る多くの人々にも色や形、ときには甘い香りでメッセージを贈ってくれる気がする。悲しいとき、苦しいとき、嬉しいとき、見る様々の心が花に写る。

我が家の周りにも花づくりを楽しんでいる人達がおられるが、その様子を見てみると、本当に大切な子供を育てているような心配りである。このように愛情一杯に育てられた花は、作り手に応えて見事な花を咲かす。花は人の語る言葉に反応するということを聞いたことがあるが、まさに「心をかける」というのは全般諸事に通用するのではないか。

今年は、岡山市の花いっぱい運動に呼応して田中野田町内会の「花づくり運動元年」とか。何年後かの美しい「花のまち」を目指し、一人一人が美意識をもって取り組むならば、きっとそんな町になるはず。家々に、路地に、公園にと、花と緑の夢のような花のまちづくりに、友情と信頼の輪をグリーンと広げていきましょう。

花いっぱい運動 ー私の場合ー

本多 寿美子

昔から「花を愛する人に悪人はいない」と言います。それほど花は人の心を和やかにしてくれるものです。

我が国では花にちなんだ表現が実にたくさんあります。「花も恥ぢらう」「花も実もある」「今が人生の花」など数えあげればきりがありませんが、どんな花でも、たとえ雑草の花でも、花はそこに咲いているだけで私達に幸福感をもたらしてくれ、生命の尊さを与えてくれます。季節ごとに咲くそれぞれの花は、どれひとつとっても美しく、可憐で味わい深いものがあります。

このたびの「花いっぱい運動」にさきがけて、私の家でも決して高価な花でもなければ、立派なものでもありませんほんの草花ですが、庭いっぱい空き地のないほど、季節の花が所せましと咲きほこっています。

自然を愛し心豊かなうるおいのある生活を送るために、まずは身近な我が家からと思い実行しています。次に機会あるごとに花好きな方に声をかけ、種苗を簡単に殖やす栽培方法なども話し合っています。こうして先ず家庭から始め、町内へと花いっぱいの輪と、心の輪を広げていこうと思っています。そしてこの運動は期間だけに終わらず、永く続けてゆきたいものです。

私は花が大好きです。花の種類は選びません。どんな花にもひとつひとつ心があります。作り方は決して上手ではありませんが、許すかぎりの可能性で、花と話ができるようになりたいと思います。

「咲く前」「咲き終り」、そしてそれからも花の優しさ、美しさ、大切さを知り、花のとりこになり、花を愛し花と友達になりたいと思います。

(筆者は本町内隣接の田中町内在住)

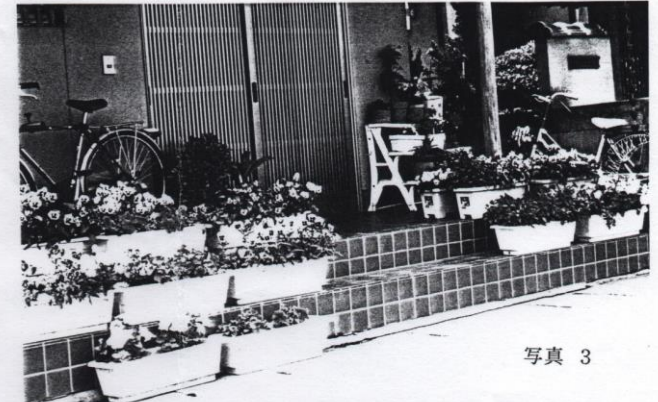


写真 3



写真 4

原稿募集

次号(10月1日発行)は、「私の健康法」の特集を予定しております。40才以上の方で、どんな健康・体力づくりをやっておられるか。例えばどんな運動を、それを始めた動機は、その効果は、日常の心の持ちかたは(精神面)、食生活は、等々を述べていただきたいと思えます。

原稿の長さは800字以内、原稿の締切は9月20日です。応募される方に原稿用紙をお届けしますので、8月末日までに平尾(8組)へ電話連絡をお願いします。多数の方々の応募をお願いします。

なお、上記とは別に、「随想」や町民(読者)の「声」などの原稿を、常時受け付けておりますので、予め平尾へ連絡してください。